英語上達 読解から

「文法・単語力重視」復権

究

英語力がなかなか向上しないのは、多くの日本人の悩みだ。出版界では最近、文法や単語力の大切さを訴える新書や、英文を「精読」する魅力を伝える本が相次いで話題を呼んでいる。英会話重視の風潮の中で、意外な原点回帰の流れが起きている。（文化部　武田裕芸）

■基礎ドリル

＜ニュースや講演のように、話者が聞き手を意識してはっきりと話している英語を聞き取れないとすれば（略）読解力も原因だと考えてほぼ間違いありません＞

冒頭から少し厳しく読者を「激励」するのは、北村一真・杏林大准教授の『英語の読み方』（中公新書）だ。新聞やSNSなど様々な場面で使われる英語の読み方のこつを、分野別に紹介する。お薦めの一冊に、駿台文庫の『英文法基礎10題ドリル』を挙げるなど、導入部で文法や単語力の必要性をはっきりと訴える。

担当編集者の楊木文祥さん(32)は「仕事などの場で本当に役に立つ英語本を作りたかった」と語る。硬派な内容にもかかわらず発売後すぐに重版され、現在、今年出た中公新書の中では最多の4万5000部に達した。

昨年末に岩波新書から出た今井むつみ・慶大教授の『英語独習法』も、現在6刷11万部と人気だ。例えば「a」と「the」の違いを考える際、文法の理解だけでなく、背景にある「知識のシステム」を理解する大切さを説く。英語への深い興味を重んじる点は『英語の読み方』に通じる。

■原文と読み比べ

著名な英米文学者が、原文とじっくり向き合う楽しみを教える話題作も相次ぐ。研究社は4月、柴田元幸さんが編集と訳文、注釈を担当した全6巻のシリーズの刊行を始めた。その名も、「英文解釈教室」ならぬ『英文精読教室』――。

見開きの左ページに英語の原文、右ページに対訳、下部に注釈を配置する。第1巻はノーベル賞作家のカズオ・イシグロの作品も収め、注釈欄が半分近い分量を占めるページもある。

阿部公彦・東京大教授の『英文学教授が教えたがる名作の英語』（文芸春秋）も、『ロビンソン・クルーソー』をはじめ有名な作品の原文と訳文、文法上のポイント、作品の時代背景や文化の違いも紹介する。

英国の有名なジェイン・オースティンの小説『高慢と偏見』の中で、女性たちが語る恋愛論などを原文と読み比べるのも楽しい。

■「学び」問い直す

現在の学校の英語教育は、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能をバランス良く伸ばすことを重視する流れだ。その中で、これらの本が注目される背景には、改めて外国語を読み、学ぶとは、どんな営みなのか問い直す機運が高まっていることがありそうだ。

『英文精読教室』の担当編集者の金子靖さん(55)は、「英語民間試験のTOEICなどは会話力が重視されるが、この本はその流れと全く逆の方向性。それがかえって支持を得た。私自身も英語力を根本から改善するには精読が必要だと痛感し、企画した」と話す。

話題を呼んでいる英語本＝三浦邦彦撮影

阿部公彦・東京大教授＝写真＝は、「外国語を学ぶとは、異なる（言語）システムの間を自在に出入りすること」と語る。「新型コロナウイルス禍にある今こそ必要な柔軟な発想力が、深く学ぶことで育まれる」と訴える。

柔軟な発想 育める

阿部公彦・東京大教授

さらに、現在のような非常の時にこそ、あえて外国語で文学作品を少しでも読んでみるのが役立つと語る。「物語を読むことは、答えの出ない葛藤とつき合うことになる。それらとつき合うことで、現実に向き合う力を養える」

会話ばかりが重視されがちな現代の傾向については、「誰かと英語で話すには、まず考える力が必要となる。読むことは、会話以上に私たちに多くの情報を与える。英語で発信するには、読解の力が土台となることを理解してほしい」と強調する。

(C)読売新聞社　無断転載・複製禁止。放送、出版等での二次利用の際は
読売新聞知的財産担当（mail: t-chizai06@yomiuri.com tel:03-6739-6961)まで。